

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第五章 午後一時一七分 午後三時一三分

二人は家で昼食をとりました。支度をしたのはミス・ペティグールです。パントリーに冷たくなつたチキンの残りが見つかりました。冷たいチキンなんて、ミス・ペティグールにとっては贅沢の極みです。ミス・ラフォースがリープフラウミルヒの甘口ワインを開け、ミス・ペティグールにすすめます。ミス・ペティグールは難しい顔をして用心しいしい、ゆっくりとすすりましたが、いっそう、なんでもこいという気分になつた(それ以上、大胆な気分になれるとすれば、ですが) 他は、何事も起こりませんでした。

ゆつたりとくつろいでコーヒーを飲んでいると、ベルが鳴りました。ミス・ペティグールは期待をこめてぱつと顔を上げました。またなにかが起こりそうです。ミス・ペティグールはベルの音を聞いて飛び上がったのですが、ミス・ラフォースのほうがかもつとすばやくドアのところに行きました。そして深紅の薔薇の大きな花束が入つた箱を抱えて戻ってきました。

「まあ、きれいですこと！」とミス・ペティグールは感嘆の声をあげました。

ミス・ラフォースががさごそとカードを探します。

「明日会おう」声に出して読みました。「ニックだわ」

「ニック！」ミス・ペティグールの声の調子が下がりました。

「ニック！」ミス・ラフォースの声が感極まって高まります。「まあ、あの人ったら！」

そして薔薇の花束を抱えると、顔を埋めてその香りを吸い込みました。その顔に、ゆつくりと甘い感傷が浮かんできます。

「ああ！」とまたささやきました。「なんて優しいの！」

そして申し訳なさそうにミス・ペティグールを見やります。

「ニックつてめつたに花を贈ってくれたりしないのよ。そついうタイプじゃないの。だからね、彼がくれたつてことは、他の人よりもつと意味があるのよ」

ミス・ペティグールはミス・ラフォースの気持ちがかぐらつているのを見てとりました。座りなおしてさあ行動開始です。



島田圭子画

「ふん！」
「なんですって?」
「ご立派なポーズですこと」
「どういう意味?」とミス・ラフォースが傷ついた声で聞きました。
ミス・ペティグルーは薔薇につまらなそうな視線を向けると、
「花くらい誰だって贈れますわ」と言いました。「お金がある男なら、店に行つてミスだれそれに花束を届けてくれ、って言つなんて朝飯前ですもの。面倒もないし、心配もないし、簡単だし、馬鹿で感傷的な女はみんなこつすれば感激するつてよおく分かつてるし。不思議ねえ!」ミス・ペティグルーは気楽に言いました。「花というのは女の理性をぐらつかせますわよね」
「でも! 彼、優しいと思つわ」とミス・ラフォースがかばうように言いました。
「ええ……とつてもね」とミス・ペティグルーが皮肉っぽく答えます。
「だつて。ほかに彼、どうすればいいの?」ミス・ラフォースは少しむきになりました。
「じゃ、これはあなたが一番好きなお花?」とミス・ペティグルーが尋ねました。
ミス・ラフォースは薔薇を見つめました。
「そうね、違つわ」と白状します。「本当のことというと、真つ赤な薔薇つてそれほど好きじゃないの。ありふれてるでしょ。蘭と同じよね。男つて蘭を贈つてくれるけど、それは蘭つて高いし、高いつてことを相手を知つてるからじゃない? でもそついつのつて安っぽくないかしら。ただ高いだけでその花をプレゼントするのつて。なんだか『こんなに金を遣つたぞ』つて人に見せびらかしてみたい。あたしは昔つから大きな濃いオレンジ色の菊の花が好きなのよ」

ミス・ペティグルーは手をぞんざいに振りしました。

「ほらご覧なさい。ニックはあなたがなんの花が好きか知ろうとさえしなかつたんですよ。もし、ちゃんと聞いたんだつたら……！ まあ、少しは気持ちがこめられてますわね。でもただ花屋に入つて、バター・ポンドか何かみたいの花を注文して送つて寄こすのはだめよ！」そう言つて、「ごめんくださいましね。でもあたくしならそれじゃ納得しませんの」

「あなたの言つとおりだわ」とミス・ラフォースが言いました。「そんなこと考えたこともなかつたけど。確かにそうね。男の人の本当の気持ちつてそういう小さいところに表れるのね」

そして花束をソファの上にぽんと投げました。

「あら！」とミス・ペティグルーが急いで言います。「でも花の罪じゃありませんわ。お水に入れてあげたらいかがかしら……？」

「そうね。そうするわ」

ミス・ラフォースは空いた花瓶を見つけるとキッチンに水を入れに行きました。ミス・ペティグルーは立ち上がり、薔薇の花束を取り上げるとそのかぐわしい香りに酔いしました。

（ああ！）とミス・ペティグルーは思いました。（もしだれか男の人が真つ赤な薔薇の花束を贈つてくれるようなことがあつたら、あたくし、地面に倒れふすわ。そしてその人に体中、踏みつけられたつてかまいませんとも）

ミス・ラフォースが戻つてきたので、ミス・ペティグルーは無造作に薔薇を花瓶に挿しました。その鮮やかな色合いが、きらびやかな部屋にいちだんと華をそえます。

「三時一五分前ね」とミス・ラフォースが言いました。「まだ早いけど、あたしたち、五時にはオギルヴィー家に行かなくちゃいけないし、着替えとかお化粧つてびつくりするほど時間がかかるのよね。そろそろ準備したほうがいいわ。ね、こつちでドレスを選んでくれない？」

ミス・ペティグルーはミス・ラフォースについて寝室に行きました。「あたしたち」という言葉が耳に響いています。でもまさか、あたくしのことじゃないわ。他の誰かがミス・ラフォースのところに来るのでしょうか。でもその男性が（男性に決まっています）来るまでは、ミス・ラフォースとの貴重な時間を、一分たりとも無駄にしないで味わうのです。

「まずお風呂」とミス・ラフォースが言いました。「まだ入つてないの。この部屋のいとこはね、いつも熱いお湯が出るところ。前のフラットではときどきお湯が出なくて。でもあたしは好きなきに熱いお風呂に入るのが大好きなの。まずあたしが入るから、その後、あなたね。それからあなたのドレスを選びましょ。服を見る間、お湯をはつてくださる？」

めまいを覚えながら、ミス・ペティグルーはバスルームに入りました。くらぐらした

まあお湯の栓をひねります。まだぼうぜんとしたまま、石鹸とタオルを並べました。聞き間違いに決まっています。きつと空耳です。聞き間違いじゃなかったとしても、意味を取り違えているに違いありません。お湯が入るのを見つめながら立ち尽くします。いまや、すっかり酔っ払ってしまったよつでした。興奮と期待と喜びに酔っているのです。これまで一度も知らなかった高揚感にすっかり呑みこまれていきます。ミス・ラフォースは貞淑な乙女ではありません。でも、それが何でしょう。知る限りではミス・ラフォースには二人の恋人がいますが、ほかに何人いるか分かりません。でも、だからなんだというのでしょうか。どこかに子供を隠していて、その家庭教師を探している？ そんなのどうだっていいじゃありませんか。

(あたくし、気にしないわ)とミス・ペティグルーは心の中で大胆に言いました。(たとえ子供が二人だったとしたって)

「お風呂が入りましたわ」

ミス・ラフォースがバスルームに入っていました。ミス・ペティグルーは室内を見回します。たいへんな散らかりようでした。さまざまな色合いの薄いストッキングが床に点々としています。シルクとレースの下着が引き出しからはみ出し、椅子の背にも引っかけられています。ドレスが何着もベッドの上に放り出されています。

ミス・ペティグルーは頭を振りました。

(あらまあ)昨日までのミス・ペティグルーならそう思ったことでしょう。(なんてだらしないお嬢さんかしら。ずばらで、いい加減で、不注意で。しつげが悪いんだわ。ちゃんとしたレディの部屋はぜったいこんなふうになるもんじゃないわ)というふうにも、でも昨日のミス・ペティグルーはどこかに行っていました。

(なんて素敵な散らかりよう!)とミス・ペティグルーはおおらかに考えました。(なんて気楽なのかしら。うっとりしちゃうほどリラックスしちゃうわ! お手本もなし。守らなきゃいけない決まりごともし。レディらしく整理整頓もなくてよし)

仮に、この家で家庭教師として働くことになっても、ミス・ラフォースが部屋にやってきて、きれいに片付いているかと、じろじろ目を光らせたりするわけがありません。こんなに親切な人がいるなんて、それを知ることができただけで、嬉しさに胸が一杯になってきます。ミス・ペティグルーは部屋の真ん中に立って、嬉しそうにここにことあたりを見回していると、ミス・ラフォースがバスルームから出てきました。

ミス・ラフォースは薄いオレンジ色のシルクのカウンのほか、何も身につけていませんでした。何気なく動くたびにカウンが開き、形のいい脚や腕、しみひとつない、真っ白な肌がのぞきます。顔は熱気でほんのりとピンク色に輝いていました。お風呂の蒸気で髪が小さくなるくるした巻き毛になり、顔の周りを飾っています。ミス・ペティグルーははにかみながら、見とれてしまいました。

「なんておきれいなんでしょう」

「あら」とミス・ラフォースが微笑みます。「そう言ってくれて嬉しいわ」

そして当たり前のようにガウンを脱ぎ捨て、他の服を探しはじめました。ミス・ペティグルーは息をのみ、目をぱちくりし、それから目をぎゅっと閉じてまた開きました。ミス・ラフォースはまったく平気な顔で、自分が繊細な神経を大いに刺激しているとも知らずにそこらを行ったりきたりしています。

ミス・ペティグルーはかっかとのぼせ、動揺しながら、後ろめたくなりました。

(変なのは)と自分に言い渡します。(あたくしのほうよ。人間の体のどこがおかしいの? どこもおかしいところなんてないわ。神様がお作りになったんじゃないの。顔とどこが違うの。ええ、そうですとも。神様がご自分でおかしいとお思になるものをお作りになるわけないわ。服を着なくちゃいけないのはイングランドの気候が悪いからですよ。そつに決まってるわ。何でも考え方の問題なのよ。あたくしは馬鹿で心が狭いんだわ。あそこに立ってるミス・ラフォースほどきれいなものをこれまで見たことないじゃないの)

ミス・ラフォースは、超然とした様子で自分を鏡にうつして眺めています。「こう言っちゃ何だけど」とミス・ラフォースが言いました。「あたし、なかなかいい体をしてると思うわ。どう? この仕事をしてるとそれってすごく大事なことなのよ。スタイルが悪くなったら、ファンもいなくなるわ。体の線を保たなくっちゃ」

「こんなきれいなお体、見たこともございませぬわ」とミス・ペティグルーが言いました。

ミス・ラフォースがにっこりします。

「ほんと嬉しいことを言ってくれるわね。あなたといると、誰でも良い気分になれるわ」そしてシルクとレースのちつぽけな下着を身につけました。ミス・ペティグルーはそつと安堵のため息をもらしました。人生観を広げるのにやぶさかではありませんが、この年になると、人間、そんなに急に変わるものでもありません。

「ああ、もつぐちゃぐちゃ!」とミス・ラフォースが大きな声で言いました。「メイドがやめちゃったのよ、言ったでしょ。自分で服を探すと、絶対、きれいに片付けられないの。さてと。どっちがいいかしら?」

ミス・ラフォースは二着のドレスを持ち上げて見せました。ミス・ペティグルーは深く息を吸い込みました。どちらも素晴らしくきらびやかです。映画スターが着たらぴつたりでしょう。一つは濃いミッドナイト・ブルーの地に色とりどりの模様がちりばめられています。もう一つは、黒で、銀色のチヨーカーと、透ける広い袖を手首のところで締める銀色のバンドが付き、ウエストを同じく銀のベルトをぎゅっと締めるデザインです。ミス・ペティグルーはどちらにも気に入りました。ミス・ラフォースがどちらを着てもいいと思ったのですが、重々しく、いかにも心得たようにぎゅっぴりと黒いドレスを指しました。なにしろ黒ならいつだって間違いはありませんものね。

「黒ですわ」とミス・ペティグルー。「金髪とお顔の色と青い目に映えて……言つことなし」

ミス・ラフォースは黒のドレスにぎゅうぎゅうと身体を押し込みます。ミス・ペティグルーがボタンを留めました。

「どっちも新しいのよ」とミス・ラフォース。「請求書をニツクのところを送るつもりだったんだけど、彼と別れるんならフィルに送るのが道理つてもよね、そう思うでしょ？」

「もちろんですとも」とミス・ペティグルーは消え入りそうな声で言いました。

ミス・ラフォースは一番、大切な儀式のために鏡の前に座ります。さあ、今度はお化粧です。ドレッサーにはミス・ペティグルーが数え切れないほどたくさんのボトルや蓋付きの瓶が並んでいます。

「あら、アリス」とミス・ラフォースが言いました。「座りなさいよ。そんなふうに立ってたらくたびれちゃっわ」

人に気にかけてもらうなんて、一八歳で勤めに出てからはじめてです。幸せな気分です。ミス・ペティグルーは椅子をドレッサーのところに引っ張ってきました。

「あの、失礼ですけど」とミス・ペティグルーは言いました。ほんのちよつと顔を赤らめています。「あたくしの名前は本当はグウィネヴィアと申しますの。ええ、馬鹿みたいな名前でございますよ、ちよつとも似合わなくて。母がつけたんですよ、ちよつどサー・ランスロットとグウィネヴィアの物語を読んでいたんですわ。おっしゃるように、アリスのほうがよっぽどあたくし向きです。だって」とミス・ペティグルーは悲しげに付け足しました。「いかにアリスって顔ですわ、あたくし」

ミス・ラフォースがぐるりとこちらを向きました。

「馬鹿ねえ」とうつとりといます。「素敵な名前じゃない。完璧よ。おまけに本名だなんて。その名前があなたに格をつけてくれるわ。そうね……ひとかどの人間って感じかしら」そこで声をひそめました。「あたしの本名はね」と打ち明けたのです。「サラ・グラップっていうの。ああ言っちゃった。他の人なら絶対に言わないんだけど、あなたのこととはとっても信頼してるから。今日、あたしの顔を救ってくれたんですものね。あたし、女優になったときに名前を変えたの。デリシア・ラフォースって名乗ったのよ。ラフォースって自分で考えたの。すごくいい名前じゃない」

「ええ、ええ」とミス・ペティグルーは言いました。「ほんと、あなたはデリシアって感じですよ」

「ありがと」とミス・ラフォース。「あたしもそんな気がしたのよ」

「名前にいったい何があるの」とミス・ペティグルーは夢見心地でジュリエットのセリフを引用しました。

「いろいろよ」とミス・ラフォースはあっさりと言いました。「あたしを嫌ってるおせっかいで最低の新聞記者がいてね、そいつがあたしの本名を探り出したことがあったのよ。あの嫌らしいゴシップ欄に書かせないようにするためにあたしが何をしなきゃならなかったか、恐ろしくて口にもできないわ」

ミス・ペティグルーは恐ろしくて思い浮かべることができませんでした。

「あたし、きつと人生を棒に振ったわ」とミス・ラフォースは続けました。「分からない？ サラ・グラップだなんて、それだけで棒に振るのに十分よ。だれがサラ・グラップなんかのファンになると思う？ でもいろいろ運のいいことが重なったの。その男ねある晚いつものとおりに酔っ払ってトラックに轢かれちゃったの。それで心配事がひとつ片付いたってわけ」

「気のきいた方ですこと」とミス・ペティグルーは弱々しく言いました。

「それでラベルの続きは？」とミス・ラフォースは興味しんしんで聞きました。

ミス・ペティグルーの頭の切れ味はこの一日で劇的に鋭くなっていました。何を言われたのかすぐにぴんと来ます。

「ペティグルーですよ」とミス・ペティグルーは言いました。「グウィネヴィア・ペティグルー。ほんと馬鹿らしい名前とお思いでしょ」

「完璧よ」とミス・ラフォースがささやきました。「まさに完璧だわ。素晴らしい組み合わせ。おまけに本名だなんて。どこのろくでなしだって、あなたがほんとにエセル・ブログだとかなんとか言って馬鹿にしたりできないのよ。ねえ」とミス・ラフォースは熱心に言いました。「本当に女優になろうと思ったことないの？ 物まねの才能だってあるでしょう。あたし、少しは顔がきくのよ」

「めっそももない」とミス・ペティグルーはきつぱりと言いましたが、自分が有名で重要な人間になった気がしてきました。「一度もありませんとも」

「残念ね」とミス・ラフォースは首を振りました。「本当に残念だわ。完璧な名前がライトを浴びないなんて」

そして櫛で髪を梳きおろします。

「なんてきれいなおぐしでしょう」とミス・ペティグルーはうらやましそくに言いました。そして、鏡に映った、自分のまっすぐで、つやのない髪を少し切なそつに見やりました。「髪って大切ですね」

「いちばん違いが出るんじゃないかしら」とミス・ラフォースはうなずきます。「あたしは運がよかったの。もともとウェーブの出る髪なのよ。でもそつじゃなければパーマって手があるわよ。形を変えようと思ったたら上手なパーマに限るわ。だって、雨の中、出かけてもカールがそのままでしょ。ヘアアイロンじゃすぐまっすぐになっちゃって、前よりみつともなくなるし」そしてミス・ペティグルーにとがめるような目を向けました。

「あなた、かけたほうがいいわね。意地悪のつもりじゃないのよ。でも他人のほうが自分に本当に似合うものが分かってるってこと、ないかしら？ アルフォンスって最高のの。彼ならどうすればいいかちゃんと分かるから。あとで彼の店に行きましょう」

ミス・ペティグルーは頬をピンクにし、目を輝かせ、唇を震わせて座っていました。

「まあ、意地悪だなんて。とんでもありませんわ。でもお忘れになってないかしら、あ

たくし……」

そのときドアベルが鳴り響きました。

「あら！」とミス・ラフォース。「ちよつといいかしら……？」

ちよつといいかですって！ ミス・ペティグルーは飛び上がりました。寢室のドアを背中ではいたりと閉ざします。あんまり急いだったので自分の足につまづきそうになりました。ドアの前に立ちます。そして期待に息がつまりそうな素晴らしいこの一瞬を味わいます。それからドアを大きく開いたのです。